

『主よ。どうして。』

— 第二回神学研究会議開会説教 —

唄野 隆

今回の研究会議の主題は聖書論ですが、神学の専門家の先生方を前にして、素人の平信徒である私が開会礼拝の説教をさせていただく破目になり、恐れ戦いております。ただ、すべてのクリスチャンは聖書の御言に養い育てられて信仰生活を送っているものであり、聖書をどう受け取るかは重要な神学的課題であるとともに、すべてのクリスチャンの信仰生活と深く関わる実践的問題でもあります。そういう意味で、ひとりのクリスチャンとして、神学専門家でない私がこの問題について発言することも許されるかと存じます。

私はキリスト者学生会(KGK)の交わりの中で学生生活を過ごしましたが、そこで、自分自身の生涯についての主の召しを祈り求めることの大切さを教えられ、その教えに従って祈り求めていたとき、最後まで私の心にかかっていたのは、一般の学生社会の中で主を証しすることと聖書観の確立のために勉強し奉仕することとの二つでした。結局、私自身が学生時代に自覚的信仰を与えられたことと世俗の生活との関わりの中で信仰上の悩みを経験したことな

どから、一般の学生社会の中で主を証しすることに主の召しを認めてそのまま大学に残ることにし、主もまた道を開いてくださって今の道に導びかれてきたのですが、個人にとっても教会にとっても正しい聖書観をもつことがどんなに大切であるかという認識は、そのときも今も全く変わりがありません。その意味でも、今回、聖書論の問題が真正面から取り上げられるようになったことは、たいへん意義深いことだと喜び感謝しております。

—

「聖書は誤りのない神の言であって、信仰と生活の唯一の基準である。」これはすべてのクリスチャンの告白です。教団・教派の違いや伝統の差に応じて表現に多少の違いはあっても、告白の基本は同じです。

しかし、この信仰の告白を非人格的な客観的命題として捉え、そこからすべての論理的思考や処生の方法を機械的に導びき出すとき、薄っぺらで人間味のない教条主義の化け物が出てきます。「聖書は正しく誤りがない。」と主張しても、その奥に御言による主との親しい人格的交わりを欠いていれば、教会の徳を立てることなく徒らにひとをさばきひとを切り捨てる排他性に捕えられてしまいます。そして、「聖書は正しい。」という主張を、主との深い人格的交わりとは関わりのない教義上のお題目のように受けとめさせる危険は、私たちの回りに満ちています。

たとえば、若者がよく歌うゴスペル・フォークに「悲しみなんか知らないさ」という歌があります。そこでは「苦しみなんかおきらばさ。ぼくらにはいつもみことばがある。たとえどんなに疲れていても、聖書をちよいと聞いてごらん。……」と歌われています。作者は、若者たちが悲しいときや苦しいときに聖書によって神さまの御言を聞くようにという善き願いをもってこの歌を作られたのだと思いますが、ギターに合わせて調子よくこの歌をうたっている

『主よ。どうして。』

と、つい、聖書を、悲しみや苦しみ、また淋しさなどにたいする解決を安直に示してくれるアンチチョコのように考えてしまう危険を感じます。また、聖書協会やギデオンの協会などから、たとえば、病気のときには聖書のどの箇所を、眠れないときにはこの箇所を、試験に臨むときにはどこそこを、というように、状況や問題に応じて読むべき聖書の箇所を示した「聖書を読むための手引き」が出されています。これも聖書を読みなれていない人がふさわしい御言に出合う助けになるようにという善き願いから出た尊い努力の実ですが、日々御言によって主との霊的、人格的交わりに進むべきクリスチャンにたいしては、聖書を、いろいろな問題にたいする非人格的で安直な解答集のようにみさせる誘惑になります。私はよくコピーの機械を使いますが、機械に何かトラブルが発生するとすぐ文字盤に特定の記号が出、使用書でその記号のところを見ると、「紙がなくなったから紙を補充せよ。」とか、「紙づまりだから、どこそこを開き、こここうして、詰まっている紙を除去せよ。」と指示されていて、その指示に従えばいつもよいコピーがとれます。日々の御言による主との交わりを欠いて、先の「聖書を読むための手引き」だけに頼ってその時どきの問題の解決を求めて聖書を読むクリスチャンは、聖書をコピー機械の手引書のように見なしているのではないのでしょうか。しかし、聖書の正しさは機械の使用書の正しさのような非人格的で機械的な正しさではありません。

「聖書は誤りのない神の言であって、信仰と生活の唯一の基準である。」というのは、人格的な神さまとの触れあいの中から出てくる告白です。自分の全存在を賭けて神さまとぶつかり、聖書の御言による主との全人格的関わりに生きる人は、聖書の御言について、「主よ。あなたの御言は本当に真実です。そこにうそ偽りはもちろん少しの不確かさも間違いありません。」と告白し、聖書の御言を全面的に受け入れ、自分の思考と自分の行動のすべてをその御言に基づかせようとするようになるものです。このことを、出エジプト記三三章七節から一四節までの神さまとモーセの対話から学びましょう。

二一

私どもの教会では、「日本アライアンス教団兵庫教会聖書一日一章」に導びかれ、「堺大浜教会聖書一日一章」のプログラムによって教会形成の土台づくりをしています。創世記から黙示録まで聖書の順番に従って毎日一章ずつ会員みんなが同じ聖書の箇所を読んで、それぞれの静思の時を守り、同時に全員が「〇〇コイノニア」という小グループにわかれてそれぞれの一週間の御言を通して与えられた恵みをわかちあひ祈りを共にするようにしています。御言から自分自身にたいする主の語りかけを聞きそれに応答する主との個人的な交わりが信仰生活の基礎であり、その主との個人的な交わりに支えられた共に主を仰ぐクリスチャンお互いの交わりが信仰生活をこの世の生活の中に具体的に受肉させる道だと信じているからです。日々の御言の学びを助けるために、あらかじめ「御言の学びと祈りのノート」を配布し、ひとりひとりがそのノートの質問に従ってその日の御言を学び、その日自分に語られた主の御言に答して祈るようになっています。またその日の聖書日課について三分間の電話メッセージを二四時間流して会員の御言の学びを助けるようにしています。希望者はその電話メッセージと呉教会の電話メッセージを記したコピーを手に入れることもできます。私が今回の開会礼拝で何を語るべきかを祈り求めておりましたとき、主は私共の教会の聖書日課を通して出エジプト記三三章から教えられたことをここでわかちあうように示してくださいました。

出エジプト記三三章の出来事は、モーセがイスラエルの民をシナイ山のふもとに待たせてひとり山に上り、主からあかしの板二枚に神の指で記された十の戒めの御言をいただいた時に起こりました。モーセが山の上で神さまの御言をいただいていたとき、イスラエルの民は山のふもとで、「私たちをエジプトから導びき上ったモーセというものが

どうなったかわからないから、私たちに先立っていく神さまを造ってください。」とアロンに迫り、アロンはその要求に応じて金の子牛を作りました。

それを見て主はモーセに、「さあ、すぐ降りてゆけ。あなたがエジプトから連れ上ったあなたの民は墮落してしまつた。わたしは彼らを絶ち滅ぼす。しかし、わたしはあなたを大いなる国民にしよう。」と言われました。

それになりたいするモーセの答えは驚くべきものでした。モーセは、「主よ。あなたが偉大な力と力強い御手をもって連れ出されたご自分の民に向かつて、どうしてあなたは御怒りを燃やされるのですか。またどうしてエジプト人が『神は彼らを山地で殺し、地の面から絶ち滅ぼすために、悪意をもって彼らを連れ出したのだ。』と言うようにされるのですか。…どうかあなたの民へのわざわいを思い直してください。あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルを覚えてください。…』と言つたのです。」「神さま。あなたは間違つていませんか。イスラエルの民はモーセの民ではなく主ご自身の民ではありませんか。彼らを滅ぼせば、あなたはご自分の民を救えなかつたと非難され、主の栄光は地に落ちるではありませんか。あなたはアブラハム、イサク、イスラエルにその子孫の祝福を約束されたではありませんか。」と、まるで神さまの間違ひを正し神さまをたしなめるかのような勢いです。

ここには主の御言を機械の使用書のように受けとり、そこで語られたことに機械的に従うような姿勢はありません。」「聖書は神聖です。」と言つて、記されたとおりの御言、あるいは語られたままの御言にただ盲目的に従う無責任さや卑屈さはみられません。モーセは自分の全存在をかけて神さまと人々の間の「破れ口」に立ち、神さまの御言の取り消しを求めるほどの大胆さと真剣さをもって神さまにぶつかつていきました。モーセはイスラエルのためにとりなすとき、「彼らの罪を赦してください。もしかたのないのなら、私の名前をあなたの書物の中から消し去ってください。」「とささ申しました(出エジプト記三二・三二)。モーセは正に自分の全存在を賭けて主の御言に応答し、主に

ぶつかつていったのです。その無礼を主は怒らず、かえつて主もご自分の全人格をかけてモーセの訴えに答え、主は「その民に下すと仰せられたわざわいを思い返され」ました。

それだけではありません。主はイスラエルを赦された後モーセに、「わたしはイスラエルを赦しはするが、彼らはうなじのこわい民だから、わたしが彼らといっしょにおればいつ彼らを滅ぼすことになるかわからない。だからわたしは彼らといっしょには上らない。」と言われました(出エジプト記三三・一―三三)。それには「あなたが、あなたが『わたしがお前を名ざしで選んだ。』と言つてください。あなたがこの民を連れて上れ。』と言われたのであり、あなたが『わたしがお前を名ざしで選んだ。』と言つてください。たのではありませんか。」(出エジプト記三三・一二、一三)、また「私とあなたの民があなたのお心になつていゝることは、あなたが私たちといっしょにおいでになつて、私とあなたの民が地上のすべての民と区別されることによつて知られるではありませんか。」(出エジプト記三三・一六以下)と主に迫りました。このときも主はモーセの願いを聞き入れ、主ご自身が彼らといっしょに行くことを約束され、主の御栄光をモーセにお見せになりました(出エジプト記三三・一四、一七、一九―二三)。全存在を賭けて神さまの御言に応答したモーセに、主もまた真実をこめてお答えになったのです。このような神さまとの全人格的な交わりを通してモーセは神さまとその御言の真実さを確信するようになりました。ですから、モーセが神さまと語りあつた後それを民に伝えるときには、「これは主が行なえと命じられたことばである。」(たとえば出エジプト記三五・一、四節等)と断言できたのです。さらに「これにつけ加えてはならない。滅らしてはならない。」(たとえば申命記一一・三二)、つまり聖書の御言以外に神の言はなく、聖書の御言は一点一画に至るまで聴き従うべき権威ある誤りなき神の御言だと言つてきたのです。

『主よ。どうして。』

このような神さまとの全人格的な交わりの中から神さまのご真実を知ったモーセの唇には、「いったんイスラエルを滅ぼすと言つておきながら後になつて赦すと言ひ、またイスラエルといっしょに行くと言ふ。主の言にも矛盾があ

る。「というふうな吹きは出てきません。モーセは毎日の主との深い交わりの中から、イスラエルを滅ぼすと言われた御言の奥にかくされている主ご自身の悲しみの深さとみ怒りの激しさを理解し、共感し、しかも「これはあなたの民ではありませんか。」と語って、イスラエルを赦し彼らと共に上って行くことを願っておられる主の本音を引き出したのです。ですからモーセにとっては、はじめの御言も後の御言も共に主のみこころを伝える真実な御言で、そこに何の誤りも矛盾ありませんでした。私は最近、ご自分の願ひとは全く違った生き方をする子供を殺して自分も死にたいと言われた親御さんに会いました。子供を殺してしまいたいという言は親の悲しみの感情を正しく言いあらわしています。その方はその子供さんを本当に愛しておられ、その人が本当に願っておられるのは親子が親しい交わりを回復することでした。

モーセが「イスラエルを滅ぼす。」と言われた神さまの御言をそのまま機械的に受けとって、「そうですか。それではあなたがイエラエルを滅ぼされるのに何かお手伝いすることがあったら仰っしゃってください。何でもします。」などと答えたら、神さまはどんなに怒り悲しまれたことでしょう。モーセがもしこのような非人格的な機械的靈感論者であったら、出エジプト記は今のような深みをもって神さまの御愛を示すものとはならなかったでしょう。大切なのは深い人格的交わりに基づく神さまの御言の真実さであり、主との人格的交わりから切り離された、単なる歴史的事実を伝え、神学的命題を示し、宗教的生活の指針を与える記録や文字そのものではありません。モーセはイスラエルの墮落ぶりを目の前にしたとき、怒って、神さまが神の指をもって記された石の板二枚を投げ捨てて打ち砕きましたが(出エジプト記三三・一九)、神さまはそのことでは少しもモーセを責められませんでした。

本当に主を愛し主を信頼し主との深い人格的な交わりに生きている者は、聖書の中に間違っているように思われたり、互いに矛盾するように見える御言に出合ったとき、聖書も人間が書いたものだから間違いがあると簡単に片付けたり、また逆に、聖書に間違いはあり得ないという教義に拠って手輕に矛盾点の妥協をはかるこじつけの論理に心を向けたりしません。全人格を賭けて「どうしてですか。」と主に問い迫り、一見矛盾するかのように見える御言の奥に主の本音を聞き出します。主の本音を示されたとき、彼は、「神さまの御言は細大洩らさず真実で、そこに少しの間違いも矛盾もありません。」と恐れをあって告白するのではなからうでしょうか。

三

今回の研究会議の主題は「聖書論」です。聖書の靈感や無謬性、無誤性などの重要問題について論じられ、いろいろな聖書の釈義の恵みがわかち合われることでしょう。しかし、そのとき、自分自身の主との交わりに基づく信仰の告白とは関わりなく、ただ単にこの世の学問との対話を可能ならしめる聖書観の構築を求めるとか、今まで自分たちが守ってきた教理や生活綱領の正しさを根拠づけるために聖書の無謬性や無誤性を主張するというようなことに終わってしまつては残念です。

科学としての一般聖書学の中で非キリスト教的な学問との対話をはかろうとし、しかもその中で一般的な命題として聖書の無謬性や無誤性を論証しようとするのは無理ではないでしょうか。現在の科学的方法論をそのまま受け入れる限り、聖書の無謬性や無誤性の主張は大きな制約を受けざるを得ません。しかしそのようなばあいでも科学的認識以前の主体的信仰告白として聖書の無謬性や無誤性を告白することはできます。それによって科学的レベルにおいて対論者を説き伏せることはできなくても、実存的レベルでの証しにはなります。聖書の無謬性や無誤性のより積極的な主張のためには科学的方法論や認識論そのものの再構築という壮大な学的作業が必要になりますが、ここでは正し